

# しらの神に関する柳田国男の直感

柳田国男の名著『海上の道』に収録されている「稲の産屋」において、柳田は

「曾ては日本の西南一帯の地にも、産屋をシラと謂った時代があつたのではないかと私は考えて居る。ほゞ紛れのない一つの例証は、いはゆる産屋の穢れをシラフジョウという地方語は、こちらでも決して珍しくない。是は喪の忌を黒不浄、月の障りを赤不浄といふに対して、白であらうと事も無げに解する者が多いが、産屋の慎みを白といふべき理由は無。寧ろ黒赤二つの名の方が、この誤解に誘はれて後から出て来たもので、つまりは是も亦シラというふ語の元の意味が、追々と忘れられて行く課程だつたかも知れない。是について更に思ひ合す一事例は、愛知県の東北隅、三州北設楽（したら）郡の山村に、近い頃まで行はれて居た霜月神楽の中に、シラ山と称する奇特なる行事があつた。数多の樹の枝や他の材料を以て、臨時に大きな仮山を作り、前後に出入りの口を設け、内には棧道（さんどう・架け橋）を懸渡して、志願ある者をして其中を通り抜けさせた。是を胎内くゞりといふ言葉もあり、又障り無くこの行道を為し遂げたことを、生れ清まはりと呼んで居たとも伝へられる。」・・・と、シラについて述べているが、前田速夫は、『白の民俗学へ 白山信仰の謎を求めて』（河出書房新社 2006年7月）のなかで、その柳田国男の直感について、次のように述べている。すなわち、

『柳田が天才的なのは、こうした洞察を、初見で、あやまたず行っているからだが、シラが稲霊、産屋を意味し、誕生や再生と深い関わりがあるというのは、まさにシラ神の本質を衝いている。霜月神楽の生まれ清まわりの場、「シラ山」に言及して、それがハクサンとは別のシラヤマ本来の原初の信仰であることも見抜いているのも、さすがである。』・・・と。

実は、宗教や文化に関する「なるほど法話」というすばらしいホームページがある。

<http://www.haginet.ne.jp/users/kaichoji/index.htm>

そのホームページの「文化」に関する話の中で「循環の思想」が語られており、その中にシラに関連して私の注目する部分があるので、柳田国男の直感を補完するためにここに紹介しておきたい。

文化（第9話）：

かつて日本列島は縄文文化一色でした。そこへ大陸から弥生文化がやってきて、縄文文化を南北に分断しました。この仮説は、アイヌ文化と沖縄文化を比較してみると、その「あの世観」があまりにも似ているのに驚いて、梅原猛さんがたてた仮説です。

そのあの世観とは、魂がこの世とあの世を永遠に循環するという思想です。この世とあの世とでは、空間的にも時間的にもすべてがアベコベだと言われます。空間的には上下左右が逆なのです。

すなわち、この世とあの世とは違うけれども、どちらからも逆ではあるが全く同じに見えるということです。だから循環しうるわけです。

死とは肉体と魂が分離して魂があの世に行くことだとされますから、この世で死ぬと魂はあの世に移動し、あの世で肉体を持って生まれます。あの世で死ぬと魂はこの世に移ってまた誕生するというわけです。

アイヌでは熊の肉が最上の肉とされています。熊はあの世からミアンゲ（土産）を持ってくる客人だと考えられています。人間はその肉をいただいたら熊の魂に沢山のミアンゲを持たし丁重にあの世に送ります。これが熊の葬式（イオマンテ）です。

あの世に着いた熊は人間からのミアンゲで宴会をします。熊の仲間たちは人間の世界（この世）はなかなか良さそうなところだなと思い、この世で熊が沢山生まれて、どっさり熊が捕れるというわけです。

葬式は豊猟祈願祭でもあるわけです。人間の魂もこの世とあの世を循環し、熊と同様の葬式がなされると言われます。

人間は動植物を食べることによって生きて行かねばなりません。アイヌの人々は熊を殺して肉を食べても魂は殺していません。丁重にあの世に送り返します。肉をいただいたという感謝の気持ちの表れでしょう。大自然に生かされているという気持ちの表れだと思います。

すべての動物は他の動物や植物を食べ、植物は太陽のエネルギーと養分を吸収して生きています。そのような循環の中ですべての生き物は生きています。人間も例外ではないはずです。

生き物の循環と同時に魂の循環も考えられましょう。どんな生き物も個としての命は限界がありますが、新たな命の誕生という現象もあります。アイヌの人々はそれをあの世の魂の生まれ替わりと見たようです。

魂すなわち命はあの世とこの世を循環するのであれば、それは永遠です。人間もそんな永遠の命の流れの中にあるわけで、今生きている人間が中心であろうはずがありません。自己中心的に考えがちな我々現代人には意味のある考え方かと思います。（平成14年1月）

## 文化（第10話）：

前回、狩猟採集文化である縄文文化の循環の思想を梅原猛さんの仮説に基づいてお話ししましたが、稲作農耕文化である弥生文化にも循環の思想が見られます。

稲は一年草の植物ですから春に発芽して秋には籾を残して穂は枯死します。しかし翌年の春に籾から再び発芽して生長し、という調子で「発芽（春）→生長（夏）→枯死（秋）→籾（冬）」というサイクルを一年かけて一巡し、それを無限に繰り返す、稲という種として永続します。

人間についても稲と同じように考えたとしますと、人間は個としては誕生からやがて死んでそれで終わりのように見えますが、実は人類は太古の昔から続いているのですから、稲の籾に相当するものを靈魂だと考えれば「誕生→成人→死亡→靈魂」というサイクル（稲では発芽から枯死が半年、籾の期間が半年で一年ですから、人間では六十歳で死んだとすると靈魂の期間も六十年で百二十年で一巡する計算です）が考えられ、子供の誕生は先祖の靈の生まれ替わりと考えた人々は、稲と同じように、個々の人間の死を超えて、人間としての永続を考えていたのではないのでしょうか。

それが弥生人、或いはその後の古代日本人の考え方であったのではないのでしょうか。

何も靈魂というわけの分からないものを持ち出して理屈をこねなくても、親から子へと素直に考えればよいのではないかと言われる向きもあるかと思いますが、例えば、受胎のことを「タネを宿す」とか、妊娠のことを「ミ籠もる」とか言いますし、人間の「目・鼻・歯・頬」が植物（稲）の「芽・花・葉・穂」に対応しています。

更に申し上げますと、稲を刈り取って乾燥させ、円錐状に積み上げたものを「稲積み」と言いますが、昔はこの稲積みから少しずつ運んで脱穀したと言われますから、貯蔵施設でしょう。

これを沖縄の八重山地方では「シラ」というのだそうですが、「シラ」は稲積みの意味だけでなく「産屋」の意味もあるため、民俗学者の柳田国男は稲積みの「シラ」は稲魂（いなだま）が籠もり、再生する場であるという理解を示したといわれます。

「産屋」とは人間の子供が生まれる場所ですから、これは正に、人間の誕生も、稲の再生と同じように、ご先祖さまの再生と考えていた証拠だと思います。

とするとやはり「靈魂」を持ち出さないと話が合わないことになりましょう。古代日本人は人間を植物的に考えていたと思われますので、日本人の考える「靈魂」とは稲の粃に相当する植物的靈魂と言えるのではないのでしょうか。（平成14年2月）